

<国語>

学力調査等の結果分析と考察	授業改善の方策	授業創造プラン
「人物像や物語の全体像を具体的に想像すること」や、「登場人物の相互関係について、描写を基に捉えること」についての定着率が低い	・授業のUDの手立て（視覚化・焦点化・共有化）を国語の授業に取り入れていく。 ・対話活動を授業に取り入れ、意見の交流から自分の読みや考えを広げ深めていけるようにする。 ・各学年の指導内容や指導事項を系統的に取り組み、「読み方」を指導していく。 ・段落の構成に着目させながら、要旨をまとめさせる。	1・2年 ・挿絵や吹き出しの入ったワークシートを使うことで、登場人物の気持ちを考えやすくする。 ・登場人物の行動や気持ちが分かる部分にサイドラインを引いたり、キーワードに印をつけたりする。 3・4年 ・段落ごとに要点を見付け、サイドラインを引く。 ・起承転結や問いと答えを見付け、その理由を全体で話し合い、文章の構成について共通理解する。 5・6年 ・伝えたいことの中心がどの段落にあるか考え、その理由を全体で話し合い、文章の構成について共通理解する。 ・段落相互の関係に注目して読むことや筆者の伝えたいことが書かれた文を探して要約すること等の指導をする。 全学年 ・段落ごとにあらすじや要点を押さえ、自分で短くまとめて表現する力を付ける。 ・登場人物の気持ちを考える際に、理由や考えの根拠を教科書の叙述から見付ける習慣を付ける。
「書くこと」では「文中の主語・述語の関係、修飾と被修飾の関係についての理解の定着率が低い。	・日常的に文章を書く機会を多く設定し、自分の書いた文章を読み返したり、友達と共有して、アドバイスをもらったりする活動を設定する。文章を読み合う際の観点を具体的に提示した上で、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見つける指導を充実させる。	1・2年 ・日頃より主語と述語が分かる文を書くことを意識させる。 3・4年 ・文章全体を通して、相手や目的を意識させたり、一文を短くして、主語と述語をはっきりさせたりして書くことをさせる。 ・例文を提示することで、書く内容や順序を考えやすくする。 5・6年 ・学習の記録や学習の感想を記述する活動を多く取り入れることで、自分の考えを文章に表す機会を多く設ける。 全学年 ・自分の文章を書いた後、読み返す習慣をつけさせることで、自分の伝えたいことや文章構成が、相手に理解しやすいか確認をする習慣を付けさせる。
文の中で正しく漢字を使う力、漢字の書き取り	・漢字の書き取りの定着が自分でも確認できるようにする。	1・2年 ・新出漢字を使った言葉を多く集め、漢字の読み方や使い方を身に付ける。

が定着していない。 辞書や事典を使った情報の扱い方などについても課題がある。	・既習漢字は意識して使わせる機会を増やす。 ・漢字に対する興味・関心を高める。 ・辞書や事典の使い方に慣れていく。	3・4年 ・漢字のへんやつくり等から、漢字の構成や意味の枠組みを知り、漢字への興味をもつ。 ・文章を読んだり、作文や日記を書いたりする活動を多くすることで、日常的に漢字を読んだり書いたりする。 ・辞典の使い方についての入門期として、辞書をひく学習習慣をつけていく。 5・6年 ・学習の記録や学習の感想を記述する活動を多く取り入れたり、書いた文章を読み返す習慣を付けたりすることで、日常的に漢字を読んだり書いたりする。 全学年 ・文章を音読したり、小テストのための練習や間違えた漢字を繰り返し練習したりする活動を積み重ねることで、正しく漢字を読み書きする。既習漢字は文中で使って活用できるように、日常的に文章を書く時には漢字を意識して使っていけるよう意識付けをしていく。 辞書や事典、タブレットなど情報を得るための学習環境を整え、適切に学習に活用できるようにしていく。
--	---	--

学力調査等の結果分析と考察	授業改善の方策	授業創造プラン
資料（グラフや図など）から課題を解決するために必要な情報を読み取ることが苦手な傾向にある。	・様々な資料を計画的に扱い、それぞれの資料の読み取り方を指導することによって、必要な情報を読み取る力を高める。 ・グラフや表などを目的に応じて正しく読み取り、活用する力を培う。 ・既習事項や生活に照らし、資料の意味や価値を考える力を培う。	3～6年 ・グラフや、地図、年表、写真や絵、映像、文章など、様々な資料を單元ごとに精選して授業を行う。また、初めての資料に関しては読み取り方を指導する。 ・資料を読み取る際には、視点を明確にしてから行わせる。また、事実（見て分かること）のみを読み取る。 ・地図帳や、地図、地球儀を身近なものとして活用する。長期休業中に出かけた場所や学習で取り扱う場所について地図帳で調べ、調べた場所の近くには何があるかなどの気付きを大切にする。その際、地図記号や土地の高さなどを確認する。また日野市の地図、東京都の地図（3年）東京都の地図、日本地図（4年）、日本地図（5年）、世界地図・年表（6年）等を目につく場所に掲示し、普段から地図に親しみやすくなる環境を設定する。
資料から読み取ったことから、課題について考察することが苦手な傾向にある。	・問いについて資料を根拠にしながら話し合うことで、思考の質を高める。 ・毎時間、問いを設定し、一人で問いについて考える時間を確保する。 ・問いについて深く考えることができるような資料や中心発問を設定し、思考力・判断力を高める。 ・ペア学習やグループ学習を設定し、考えたことを話し合わせることで、思考を深める。	・獲得した知識を基に課題について思考することを指導する。また、思考する時間を十分にとるだけでなく、思考した内容を話し合う時間を設ける。 3・4年 ・他の單元（例：消防と警察、ごみのしまつと水など）との繋がり（共通点、相違点）を示すことで、既習事項を活かしながら考えることができるようにさせる。 5・6年 ・社会事象の特色や意味について考える時間を設ける。また、課題について考える時間を毎時間設ける。 3～6年 ・本時の課題を常に意識させ、資料等で必要な知識を獲得してから思考させる。 ・2つ以上の資料を提示し、事象を繋げたり比較したりする活動を取り入れる。 ・思考ツールを活用したり、友達との対話を通して自分はどうか考えるのか、意識しながら聞いたり、繋がりを考えながら話したりすることで、思考を深めさせる。
都道府県の位置と名称の理解に苦手な傾向が見られる。	・毎時間ごとの獲得させる知識を把握し、計画的に指導する。 ・日常的に地図に親しみ、正しく読み取る力を身に付けさせる。 ・社会は人の営みによって形成されていることに気付かせる。 ・土地の様子や農家の様子を見学するなど、体験的な活動を行うことで、理解を深める。	3年 ・学校のまわりの單元で方位について学び、日野市の周りにはどのような市が隣接しているか、方位などを手掛かりに理解を深めるなどし、地図に親しむ機会を意図的に設ける。 ・市の様子では、自分の生活には多くの人々が関わっていることや、多くの人々の営みによって社会が形成されていることを理解させる。 ・地図記号を学習した後や、実際に行ったことのある都道府県について、地図帳で調べたり、索引を用いて場所を調べたりするなどして、普段から地図帳に触れる機会を設ける。 4年 ・社会科見学で実際の様子を見たり、出前授業を活用して専門家に教えてもらったりするなどの体験的な活動を取り入れながら、自分たちの地域のことを考えさせる。 ・47都道府県の名称と位置を理解するために、地図帳に触れる機会を意図的に設ける。また東京都についても、地図や航空写真などの資料を基に、日本の国土から見た東京都の位置や特徴に興味をもち、理解が深められるようにする。 3～6年 ・調べる段階では、必要とする情報を明確にし、目的意識をもって調べられるように指導する。 ・社会の中で働く人や歴史上の人物に注目して学習を進めることで、多くの人に支えられながら、生活していることや、人々の努力のおかげで、今の社会が成り立っていることに気付かせる。 ・地図を使う機会を意図的に設け、方位などを確認することで、国や都道府県の位置関係や特色にふれ、理解を深める。

学力調査等の結果 分析と考察	授業改善の方策	授業創造プラン
6年平均正答率 62%(都67%) 5年平均正答率 60.9% (市62.3%) 選択式、短答式 に比べ、記述式 の問題に大きな 課題がある。	・ICTを活用して視覚的に問題の意味を捉えられるようにする。 ・文章問題を中心とした思考力を養う問題に繰り返し取り組む場面を増やす。	1・2年 ・文章問題に取り組む機会を増やし、記述式の問題に慣れる。 ・問題を声に出して読んだり、ノートに正確に書き写したりすることで、問題文の意味を捉えやすくする。 3・4年 ・文章問題に取り組む機会を増やし、下線を引いたりデジタルコンテンツを活用したりすることで文意を捉えられるようにする。 ・朝学習等の時間を活用して記述式の問題の解き方を練習していく。 5・6年 ・文章問題に取り組む機会を増やし、デジタル教科書やデジタルコンテンツを能動的に使用し、問題文の文意を捉えられるようにする。 ・授業や朝学習の時間に文章問題を中心とした思考力を養う問題の練習に進んで取り組む。
「図形領域」「データの活用」などの技能を身に付けることについて課題がある。	・具体物を用いて、実際に比較する機会を設け、理解の基礎となる経験を豊かにする。単位の意味や役割の理解を確実にするために、身の回りにあるものの長さや体積等について、単位を用いて測定する。	1・2年 ・身の回りの形に注目させ、初歩的な図形を探すことを通して、知識や技能を身に付ける。 ・身の回りのデータを簡単なグラフにまとめさせる場面を多く設け、経験を豊かにする。 3・4年 ・直接比較や間接比較、既習事項等では測定が困難な場面を設定し、普遍単位や新たな普遍単位を用いなければいけないという必要感を与え、単位の意味や役割についての理解をより確かなものにする。 ・デジタルコンテンツを活用し、データやグラフにまとめられるようにする。 5・6年 ・様々な広さの面積や大きさの体積のものを実際に求める機会を設け、適切な計器を選択できるようにする。 ・作図や単位換算などを繰り返し学習する機会を設けて、定着を図る。 ・情報を共有し、データをグラフや表にまとめてが空襲に活用できるようにする。
思考・判断・表現に関する問題に対して大きな課題がある。	・実生活や他教科との関連を図り、数学のよさに気付かせ、生活や学習に活用しようとする態度を養う。 ・話し合い活動を充実させ、問題の意味を理解したり、問題解決のために考えを深めたりすることができるようにする。	1・2年 ・クロムブックを活用し、具体的な場面を想定して問題を提示する。 ・算数的活動で具体物やブロックなどの半具体物やデジタルコンテンツを使い、数の大小関係の理解や量の感覚などを確実に身に付けられるようにする。 3・4年 ・オクリンクを活用して考え方を他人と共有しやすくする。 ・問題の解き方は一つだけではなく、複数の考え方を共有することで、多面的な問題の捉え方を指導する。 5・6年 ・問題解決の過程や結果を、図や式などを用いて数学的に表現し伝え合う活動を多く取り入れる。 ・オクリンクを活用して考え方を他人と共有し、様々な考え方を参考にするとともに、その考え方を自身も使いこなせるようにする。

<理科>

学力調査等の結果 分析と考察	授業改善の方策	授業創造プラン
「昆虫のからだのつくり」など、実験を伴わない学習による理解が不十分な児童が多い。	実際に飼育・観察したり、まとめの時間を充実させたりすることによって学習内容の定着を図る。 植物の栽培や昆虫の飼育を通して、自然に対する興味・関心や命を大切にしようとする心情を育む。	3年 ・画像や写真だけでなく、実際に昆虫を飼育しながら学習することで、児童の好奇心を高め、主体的に学習できるようにする。 4年 ・飼育や観察だけでなく、調べ学習やまとめの時間をとり、昆虫の体のつくりや育ち方についての理解を深める。また、昆虫が生きている環境と関連付けることで、その昆虫に適した飼育方法を考えることができるようにする。 3～6年 ・植物栽培や昆虫の飼育を通して、自然に対して興味関心をもち、命を大切にしようとする気持ちを育みながら、植物や昆虫の体のつくりや生態について理解を深める。
実験・観察の結果を分析し、自分の考えをもつことが苦手な児童が多い。	少人数グループでの実験や話し合い活動を充実させるとともに、考察や結論をまとめる学習を丁寧に行うことによって学習内容の定着を図る。	3～6年 ・視覚教材を活用しながら実験前後の変容や結果を見取りやすくするとともに、考察する視点を与えて自分の考えをもてるようにする。 ・実験後には学習問題と正対させた結論を全員で確認し、共通理解を図り、知識として定着させる。また、ICT 機器を活用しながら考えを共有する。g。
実験器具を適切な扱い方が身に付いていない児童がいる。	児童が実験器具に多く触れることができるような場の設定を行う。児童が自ら実験器具を選び、問題解決を行う時間を設け、実験器具の正しい使い方を身に付け、実験技能を高める。	3・4年 ・実験器具は、事前に正しい使い方を指導したうえで、少人数グループ（2～4名）で行い、実験器具に触れる機会を多くする。 5・6年 ・実験課題を与え、児童が実験器具を自ら選んで問題解決をしていく場を多く設定することで、実験器具に慣れ親しませ、実験技能を定着させていく。 3～6年 ・ノートやICT 機器に実験の様子を図で表すことを重視し、実験場面を文字化した状況にも対応できるようにする。

<生活科>

児童の実態	授業改善の方策	授業創造プラン
朝顔の栽培活動や虫などの生き物の飼育に積極的に取り組む児童とそうでない児童の差がある。	・身近な自然と直接かわる活動を充実させる。 ・抵抗のある児童も動植物に興味関心がもてるよう、関わり方の工夫をしたり、関わる機会を増やしたりする。	1・2年 ・年間を通して学校の中にある雑木林や地域を流れる浅川や公園・緑地などの自然に触れたり、継続的な栽培・飼育の体験を通して動植物にたくさん触れたりすることによって、自然の様子や四季の変化、それらが生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、生き物への親しみをもち、大切にしようとする心を育てる。
活動している時は意欲的だが、身近な人々、社会に進んで関わろうという気持ちが持続しない児童がいる。	・見学や体験活動後の振り返りや表現活動を充実させる。 ・ペアやグループでの話合いや発表を充実させる。	1年 ・旭が丘地区の特色を生かし、地域ボランティアの方にご協力いただいた「昔遊び」や旭が丘中央公園で行われる「たきび祭」への参加を通して、地域と関わる経験をし、地域に対する愛着をもたせる。 ・ペアやグループでの話合いや発表の場面をたくさん設け、児童の気付きを称賛したり、全体に広めたりすることにより、意欲的に考え、表現しようする態度を育てる。 2年 ・旭が丘地区の特色を生かし、地域の商工連合会と連携したサツマイモの栽培活動や社会地域センターのけん玉名人との学習、「たきび祭」への参加や町探検などの活動を通して、地域と関わる経験を繰り返し、地域に対する愛着をもたせる。 ・気付いたことや楽しかったことなどについて、言葉や絵、動作、劇化などの多様な方法により表現し、考えることを通して、地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々、自分を支えてくれる身近な人々等に親しみや愛着をもたせられるようにする。
観察カードには、よく観察をし、上手に表現できる児童がいる反面、表現することが苦手な児童もいる。	・観察の観点を明確にした授業を展開する。見たことを詳しく伝えられるようにする。 ・描画だけでない表現の方法や手立てを示す。	1年 ・絵を描くときはどこの部分をきちんと描くか、文で書くときはどのような言葉で表現するのかを具体的に例示して教える。文や絵だけでなく、発言によっても表現してよいことを伝える。 2年 ・どこの部分をかくか具体的に例示して教える。友達と作品を見合い、よさに気付かせ、自分の表現にも活かせるようにする。文や絵だけでなく、発言によっても表現してよいことを伝える。

<音楽>

児童の実態	授業改善の方策	授業創造プラン
語彙が少なく、音楽を聴いたり、感じ取ったことを発言したり、伝えあったりすることが難しい。また自らの思いや願い、意図をもち、表現することを苦手とする。	音楽に関する語彙(元気・優しい・なめらかなど)を掲示したり、ペア学習やグループ活動を取り入れたりしながら、自らの思いや願い、意図を伝えあっていくことで語彙を増やし、互いの表現のよさや面白さに気付かせ、表現の幅を広げていく。	1・2年 ・手遊び歌やリズム遊びを取り入れ、互いに触れ合い関わり合いながら、音楽に親しむ活動を取り入れていくようにする。 3・4年 ・〔共通事項〕を「音楽をつくる素」としてカードで提示し、この曲の面白いところはどこか？どんな効果があって面白いと感じるのか？という問いかけから、表現への関心・意欲を高め、表現に親しむ活動を行っていく。その活動を踏まえ、自ら表現につなげられるようにしていく。 5・6年 ・楽曲全体の構成をつかむために、比較聴取を取り入れていくことで、曲想の違いに気付かせるようにする。その気付きをペア学習で交流する。少人数なので、互いの意見を交流しあうことに抵抗なく自信をもたせることができる。また、グループ活動では互いの意見のよさや面白さを見つける視点をもたせ、よりよい表現を目指せるようにしていく。
童謡「たき火」は地域ゆかりの曲であるが、そのことを知らない児童、作詞をした異聖歌についての興味・関心があまりない児童がいる。	異聖歌の生い立ちや「たき火」がつくられた背景などを学びに取り入れたり、学校行事で「たき火」を歌う機会を増やしたりしていく。また、地域の行事である「たき火祭」の参加を促していく。	1・2年 ・「いもいも音頭」の歌や踊りに取り組み、「たき火祭」でその成果を披露することで地域行事への参加の大切さを気付かせる。 3～6年 ・異聖歌の生い立ちなどに触れながら、「たき火」がつくられた背景を学ぶ学習を取り入れていく。「たき火」の歌詞の様子を表した写真を提示し、イメージを膨らませたり、物語をつくったりしながら学びを深め、地域への関わりや「たき火」の愛着を深めていく。
音楽を通し、「いのち」に関わる内容を取り上げておらず、意識が低い。	保護者が関わる行事で関連付けながら、「いのち」の大切さや感謝の気持ちを歌う歌唱曲を教材として取り上げる。	1・2年 ・道徳「命の尊さ」や生活科「自分ものがたり」の学習と「いのち」を取り上げた歌唱曲とを関連付けること、生まれてきたことを喜んだり、これからの成長に期待をもたせるたりする。 3・4年 ・「いのち」を取り上げた歌唱曲に親しみながら、生まれてきたことや保護者、周囲への感謝を伝えられるようにする。 5・6年 ・卒業発表会を通し、「いのち」や「感謝」と取り上げた歌唱曲の歌詞に親しみ、小学校生活に関わった人たちへの感謝を伝えられるようにする。

<図工>

児童の実態	授業改善の方策	授業創造プラン
作りたい、表したいことはあっても、どのように作品に表したらよいかわからない児童がいる。	何度も試しながら表せるように材料を十分用意しておく。 つくり方の手順や表し方の例を示し、スモールステップで作品製作ができるようにする。 自分の中の小さなひらめきに気が付き活用できるよう励ましの言葉かけを多くする。	1・2年 - 失敗してもよいという安心感をもちながら取り組めるよう、また思いついたことを次々と試しながら描けるよう、平面に表す活動では小さなサイズの紙を用意したり、一人一枚ではなく何枚も描けるように画用紙等の材料を用意したりしておく。 3－6年 - 友達と相談する時間と自分で考える時間の使い方を意識させ、友達からのアドバイスも自分の作品にいかすことができるようにする。 - タブレットで写真を撮り、作品作りに活用している。 全 - 板書の仕方を工夫し、つくり方の手順を確認できるようにする。 - 簡単な参考作品を用意し、児童が分かりやすく活動できるようにする。 全 - ICTを活用して動画や拡大投影機を用いて、作業の手順が分かりやすくする。
意欲をもって取り組むことはできるが技能面で困難さを抱えている児童がいる。	描画することや用具の扱いに十分慣れることができるよう、繰り返し描いたり用具を使ったりして表現する時間をつくる。	1・2年 - 困難さを抱える児童がはさみ・のり等の用具の基本的な使い方ができるよう、個別指導にあたる時間を増やす。 3－6年 - 初めての用具は、友達と確認し合えるようグループでの活動をしたり、丁寧に繰り返し行わせたりしながら活動する。過去に使った用具は、ポイントを再度確認し安心して活動できるようにする。
材料を大切にしようとする意識が薄い。	材料を最後まで使い切ることや、再利用を意識することを具体的に指導する。	1－2年 - 切れ端の紙や使いかけの材料もストックしておき、図工の時間や、学級の係活動の時間にも自由に使えるように再利用の機会をつくっていく。 3－6年 - 捨てるゴミ、使うと作品を意識させ細かな部品も活用できることを伝える。中心から使わず、はじから使うことを意識させる。
作品を失敗したくないという思いが強い。	少しの間違いでも、作品の生かし方によっては成功になることを伝える。	全 出来ないと思ったこともやってみるという気持ちを持たせる。たとえ間違っても、見方によっては間違いではなく、間違えたところから間違えていなかったようにフォローすることが次の自分の自信になることを意識して伝えていく。

<家庭>

児童の実態	授業改善の方策	授業創造プラン
学んだことを、暮らしの中で実践しようとする意識が薄い。	・学習の振り返りや学んだことを実生活に生かすための計画作りを充実させ、学んだことの日常化へとつなげる。	5・6年 ・児童が日々の暮らしに目を向け、楽しみながら生活を豊かなものにしていくようにするために、指導の工夫、教材・教具の開発に努める。 ・実生活で活用することができるような視点で授業を進めたり、家庭に協力を呼びかけたりする。
学習には、意欲をもって取り組む児童が多い。特に「食」の学習に対する意欲は高い。	・「食」の学習では、用具の扱いや栄養バランスについて基礎的・基本的技能を身に付けられるようにする。	5・6年 ・易から難へ、段階的な題材の配列を工夫し、児童が自信をもって基礎的・基本的技能を身に付けられるようにする。 ・児童同士の学び合いの場を意図的につくり、児童が主体的に学習活動を行えるようにする。

<体育>

児童の実態	授業改善の方策	授業創造プラン
・意欲をもって運動に取り組む児童が多い。 ・運動技能に個別化が見られる。	・運動の特性を味わわせることで、学習したことを日常化につなげていく。 ・技能向上に必然性をもたせるための、メイン活動を工夫していく。	全学年 ・授業中の児童が活動する時間を22.5分することを目指す。 ・運動の特性を味わわせるとともに、年間指導計画通り知識・技能を積み上げていく。
・児童が言葉を掛け合い運動に取り組んだり、チームで作戦を話し合ったりする場面が見られるようになった。 ・友達と一緒に運動をし、躓きについて伝えたり一緒に練習したりする姿が見られるようになってきた。 ・運動の特性、ポイントの理解と実践、体験にもとづく言葉がけが分からない児童もいる。	・教師が児童の学び合いの視点を提示する。 ・学び合いができている児童を称賛する。 ・児童が言葉掛けできるように、教師が何を伝えればいいのか手本を示す。 ・振り返りの時間を設ける。	全学年 ・授業の真ん中、最後には振り返りを行い、学び合いの仕方を知ったり、学び合いをするための視点を共通理解したりする。 1～3年……クラス全体で振り返りを行う。 4～6年……全体→グループ(チーム)で振り返りを行う。 5・6年 ・授業前に、体育ノートの良い記述を紹介する。 (例) 友達の良かったところ。 なぜできるようになったか。 次への目標。
・経験してきた運動領域に偏りがある。 ・東京都運動能力調査において、東京都の記録を上回っている。しかし、投げる技能が低い傾向にある。	・アクティブスポーツで、多くの運動を楽しく取り組み運動経験を積む。 ・運動の系統性を意識して授業を行う。 ・課題となる動きを授業の内容に入るよう、規則(ルール)を工夫する。	全学年 ・アクティブスポーツで多くの運動をし、いろいろな体の動かし方を体験させ体力の向上を図る。 ・年間指導計画を基に指導を行う。 ・授業内で振り返りを行い、みんなが活躍できるような規則(ルール)にし、運動に対する意欲を向上させる。
・基本的な生活習慣が身に付いている児童が多い。 ・健康や安全についての知識はあるが、実生活で活用できていない児童が見られる。	・怪我の防止、心の健康及び病気の予防について理解できるようにする。また、養護教諭や家庭との連携し、実践させる。 ・安全指導日や保健の学習で、危険回避能力を高めるような指導をする。 ・学習内容を常に日常生活と関係付けて指導する。	全学年 ・児童の発達段階、実態に応じた生活習慣の指導を行う。 ・具体的な事例を提示し、事故や怪我に対する危険回避能力を養う。

<外国語・外国語活動>

児童の実態	授業改善の方策	授業創造プラン
外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め基本的な表現に慣れ親しむ活動が不十分である。	世界の挨拶、食事、数字の言い方など「世界には様々な文化がある」と実感することができる授業を行っていく。また、英語の文字に親しみをもち、覚えやすいように簡単な単語と結び付けてデジタル教材やワークシート等を活用して授業を進めていく。	全 ・教材保管場所を設定して、すぐに教材を活用できるように必要な教材(単語カードやカルタ等)を揃え整理しておく。 ・デジタル教材には外国の文化だけでなく、日本の文化も紹介されている。日本の文化のよさを外国の文化と比較することで再確認させ、訪れた外国人に自分が住んでいるまちや日本の文化を紹介するような授業も組み立て行っていく。
外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う活動に意欲的な児童が多いが、自信がもてなかったり恥ずかしがったりして積極的に活動に参加できない児童も見られる。	基本的な表現や語句を使って、外国語で聞いたり伝え合ったりする活動を多く取り入れる。また先生(ALT含む)や友達と英語を使ってたくさん会話を行う活動を取り入れていく。	全 ・デジタル教材を使用しながら児童の実態に合ったダイアログ(会話文)を選択し、授業を組み立てていく。 ・外国語活動の授業の中で、『このような状況で会話をしているのだ』と児童に直感的に理解させる状況設定を見せ、会話文の練習を行う。 5・6年 ・発達段階的に自信がもてなかったり恥ずかしがったりして積極的に参加できない児童には担任の方で個別に声をかけ対応したり、ペアなど小グループなどで外国語(英語)をツールとしたコミュニケーションができる場を設定したりするなど児童の実態に合わせ授業を進めていく。 3・4年 ・デジタル教材や先生(ALT含む)と繰り返し話型を練習することで自信をつけ、積極的に話せるように進めていく。
多くの児童は外国語(英語)の音声や基本的な表現に慣れ親しむことができているが、外国語の音声や基本的な表現があまり理解できずに、分からないことから外国語に対する苦手意識をもっている児童も多少見られる。	教科書や副読本には、外来語と英語の発音の違いを扱う内容や外国の人たちの生活を扱った内容もある。文化に対する理解を深めながら外国語(英語)の音声や基本的な表現に慣れ親しむようデジタル教材を繰り返し使う。リスニングも何度も取り入れ、児童が「分かった!」「できた!」と達成	全 ・デジタルコンテンツを使い、児童が楽しみながら外国語(英語)の音声や基本的な表現に慣れ親しむことができるよう、児童の実態に合ったダイアログ(会話文)を考え授業を進めていく。 ・外国語(英語)を通じて、外国語の音声や基本的な表現に親しませるとともに、アクティブラーニングの視点からペア学習や

	感を味わうような授業を進めていく。また児童が発話した時はほめ、児童の自信につなげることができるようにする。	フリートークの活動を多く取り入れ、積極的にコミュニケーションを取ることができる児童の育成を目指す。 ・繰り返し聞いたり発音したりすることで、自信をもたせていく。
活字体で書かれた文字をみて読み方を発音することや、大文字,小文字を活字体で書くことについて苦手意識をもっている児童がいる。(高学年)	身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりする活動を繰り返し行い、音声で十分に慣れ親しむ活動を通して、音声と読むこと・書くことをつなげて理解しやすくする。	5・6年 ・デジタル教科書、ALT、ペアやグループ活動を通して、基本的な表現について音声で十分慣れ親しめるように授業を進める。 ・デジタルコンテンツや板書・掲示物を使い活字を提示することで、音声と活字体をつなげて理解しやすくする。

＜特別の教科 道徳＞

児童の実態	授業改善の方策	授業創造プラン
自分の考えをあまり発表できないと感じている児童がいる。	・自分の考えを発表できるような場の工夫をする。	1・2年 ・ペアでの対話を取り入れたり、ネームプレートを張ったりして、自分の考えがもてるようにする。 3・4年 ・ペアでの対話を取り入れたり、机の隊形を工夫したりして、話し合いの雰囲気作りをし、自分の考えをもったり、友達の考えを聞いたりできるようにする。 5・6年 ・複数回のペアでの対話、グループによる話し合い後に全体で共有する時間を設ける。
友達とかかわろうとする気持ちはあるので、さらに友達のよさを見付け、互いに認め合う心を育てる。	・道徳ノート等を活用し、一人一人が考えを表現する場をつくる。 ・資料に共感するだけでなく、自分事としてとらえられるようにしていく。	1・2年 ・友達の考えや新たな気づきを書き込み、自分の振り返りに活用することで、今まで気付かなかった友達の良さに気付かせ、自分とのかかわりで道徳的価値が捉えられることができるようにする。 3～6年 ・身近な内容についての資料では、資料を読んで、「自分だったらどうするか」など、自分の考えをもたせ、自分の考えと比べながら、友達の意見を聞き、多様な考えがあることに気付けるようにする。
おまつりや子供会活動に参加する児童が多い。 (今年度は、感染症対策のため行われなかったことが多い)	・栽培活動や生活科のゲストティーチャーとして地域の方々から学ぶ時間を計画する。 ・郷土教材を活用する。 ・「歩こう調べようふるさと七生」を活用する。	1・2年 ・大根やサツマイモ栽培の活動を通して、地域の方にご指導いただく中に地域の方に対する感謝の思いを深める。 3・4年 ・地域への思いを深めるために、旭が丘地区の特色を生かし、「たき火」と異聖歌について取り上げる。 5・6年 ・日野市への思いを深めるために郷土教材の「日野産リンゴができるまで」を取り上げる。

<総合的な学習の時間>

児童の実態	授業改善の方策	授業創造プラン
児童によって、地域・社会にかかわろうとする態度や、地域や郷土について知っていることについて個人差が大きい。	・児童が地域や郷土を知り、誇りをもち、進んでかかわろうとするようになるために、地域・社会に出て、見学や体験をしたり地域の方と繰り返し関わったりする学習活動を展開していく。	3年 ・総合的な学習の導入として、校内にある雑木林を題材に探究活動を設定し、学習の流れや方法を学ぶ。 ・旭が丘地区の特色を生かし、地域・社会と連携して、3年生で「たきび」と異聖歌について探究のある活動をする。 4年 ・旭が丘地区の特色を生かし、福祉施設と連携した福祉の体験・学習を行っていく。 5年 ・旭が丘地区の特色を生かし、地域・社会と連携して取り組んでいく。日本文化体験や工場・企業見学等体験的な活動を取り入れながら、探究活動をしていく。 6年 ・旭が丘地区の特色を生かし、よりよい地域になるために自分たちにできることをについて課題を見つけ、地域・社会と連携して取り組んでいく。 3・4・5・6年 ・お世話になった方や保護者、他学年に学んだことを伝えるなど、目的を設定して取り組んでいく。
学習に必要な情報を集めたり、集めた情報から整理分析をしてまとめたりすることが苦手な児童が多い。また、ICT活用能力の個人差が大きい。	・児童が課題を設定し解決に向けて探究的な学習を展開する中で、情報活用能力、ICT活用能力を高められるよう学習活動や支援を工夫する。 ・ペアやグループでの話し合いや発表を充実させる。	3年 ・情報収集や整理が苦手な児童には、児童が使う資料を絞って例示し、適切に取捨選択できるよう支援する。 4年 ・書籍やインターネットを活用して情報収集をしたり、調べたことをプレゼンテーションソフトにまとめて発表したりするなどの情報活用能力を高める。 5・6年 ・情報収集や整理について、書籍、インターネット、インタビューなど多様な方法を、国語科や社会科の学習と関連して広く行うこと通して情報活用能力を高める。 ・学んだことを文章や図表などに整理し、プレゼンテーションソフトやポスター・新聞等にまとめる活動を通して、学習したことの比較・関連付けをしたり、友達とお互いが調べたことを学び合ったりする。

第5学年 「日野市学力調査」結果分析(令和5年度)

国語		平均正答率(市)	67.1(70.5)
分 析	全体の正答率は、市平均を3.5%下回った。観点別に分析をすると、「知識・技能」が市平均を4.5%、「思考・判断・表現」が2.5%下回っている。A-D層の差が応用では、70.6%であり、A層とD層の差が大きく、かつA層とB層の差が大きい」パターンⅠの判定であった。 領域別にみると、「言葉・情報・言語文化」(マイナス4.5%)、「話すこと・聞くこと」(マイナス4.2%)、「読むこと」(マイナス1.7%)、「書くこと」(マイナス0.5%)と、いずれも市の平均を下回っている。ここから、本校の児童には、特に「言葉・情報・言語文化」、次に「話すこと・聞くこと」に課題があると言える。「言葉・情報・言語文化」の中では、特に「漢字の書き」「情報の扱い方」の正答率がそれぞれ、市平均マイナス7.4%、9.8%と低かった。このことから漢字の書き取り、辞書や事典を使った情報の扱い方などについての指導を充実させる必要があることが分かった。「話すこと・聞くこと」については、5問中4問が市内平均を下回っており、相手の意図をつかみながら聞く力や目的や意図に応じた的確に話す力を身に付けられるように、対話活動を取り入れながら指導を充実させる必要があることが分かった。		
算数		平均正答率(市)	60.9(62.3)
分 析	全体の正答率は、市の平均を1.4%下回った。観点別に分析をすると、「知識・技能」が1.3%、「思考・判断・表現」が1.8%それぞれ市の平均を下回っていた。A-D層の差が応用では、60.8%であり、A層とD層の差が大きく、かつC層とD層の差が大きい」パターンⅢの判定であった。 領域別にみると、「データの活用」が10.9%、「図形」が3.0%、それぞれ市の平均を下回り、「数と計算」が0.6%、「変化と関係」が1%、それぞれ市の平均を上回った。「データの活用」では、「気温の変化が最も大きい時間帯を選ぶ」「折れ線グラフをかく」がどちらも市平均を下回っており、算数やその他の教科でもグラフの活用についての指導を充実させることが必要であることが分かった。また、「図形」では、角度と面積の問題が市平均を下回っている。角度や面積を直接的に問うものではなく、それらを導くための式や単位変換を含んだ問題であることから、様々な視点や複合的な要素を含んだ問題に取り組むなど、図形の見方を豊かにしていく指導が必要である。「数と計算」について、単元により正答率の高いものとそうでないものがあるので、引き続き、朝学習や隙間の時間を使って計算練習を推進していきたい。その他、低い水準の問題に重点的に取り組ませたり、下学年の基礎的な内容に関して、ベーシックドリル等を活用して復習する機会を時々設けたりしていく必要があると感じた。C層とD層の差が大きいことから、D層に対して、個別の対応等をして、基礎的な力をつけることも必要である。		

第6学年「全国学力・学習状況調査」結果分析(令和5年度)

国語		本校平均正答率(都平均正答率)	66%(69%)
分 析	全体の正答率は、都平均を3%下回った。観点別に分析をすると、「知識・技能」が都平均を4.6%、「思考・判断・表現」が2.0%下回っている。領域別にみると都平均との乖離が大きい順に「言葉の特徴や使い方に関する事項」と「書くこと」(マイナス8.4%)、「言葉の特徴や使い方に関する事項」(マイナス5.7%)、「読むこと」(マイナス2.7%)となっている。また、「話すこと・聞くこと」は都平均を1.1%上回っている。ここから、本校の児童には、特に「書くこと」、「言葉の特徴や使い方に関する事項」、「読むこと」に課題があると言える。「書くこと」では、「文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見つけること」の指導を充実させることが必要であることが分かった。また、「言葉の特徴や使い方に関する事項」では、「学年物漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使えること」についての指導を充実させる必要性があることが分かった。加えて、「読むこと」では、「人物像や物語の全体像を具体的に想像すること」や、「登場人物の相互関係について、描写を基に捉えること」についての指導を充実させる必要があることが分かった。		
算数		本校平均正答率(都平均正答率)	62%(67%)
分 析	全体の正答率は、都の平均を5%下回った。観点別に分析をすると、「知識・技能」が5.3%、「思考・判断・表現」が4.8%それぞれ都の平均を下回っていた。領域別にみると、「数と計算」が4.1%、「図形」が7.4%、「変化と関係」が2.4%、「データの活用」が4.9%、それぞれ都の平均を下回っていた。問答形式では、「選択式」が6.8%、「短答式」が3.3%、「記述式」が5.9%、それぞれ都の平均を下回っていた。これらの点から、本校の児童は、算数全般に対して課題を抱えており、学習において基礎的・基本的な内容の反復練習と文章問題を中心とした思考力を養う問題の練習に進んで取り組ませていく必要がある。また、問題別に見ると、割合や表から条件に合う数を読み取る問題、場面を適切に捉えてイメージすることが苦手であると考えられる。また、記述式についての正答率低く、さらに無答率をみると記述式問題4問全てで都の平均より無答率が高かったのため、授業の中で考えを言葉や文章で表現することを増やしていく必要性があることが分かった。		